

つなぎ言葉 I mean と関連性

山 田 大 介

1. はじめに

本論は発話と発話の間に現れるつなぎ言葉 (fillers) としての I mean が持つ意味機能を、関連性理論の立場で議論するものである。I mean は you know などと共に、インフォーマルな語として最近まであまり多く研究対象とされてこなかった。また最近の研究においても、この表現は様々な呼ばれ方をされ、正確な定義立てや明確な分類をされていない。例えば、verbal fillers や fumbles、softeners、pause-fillers、hesitation-markers、cajolers、discourse markers、pragmatic particles、turn-holders、pragmatic expressions (Crystal and Davy (1975), Erman (1987), and Quirk, Greenbaum, Leech, and Svartvik (1972), Schiffrin, D. (1987)) などと呼ばれてきており、実際にはこれらの用語は極めて混乱や誤解を生み易く、一部分では細かすぎる分類であったり、また一方では大まかすぎる場合もあったりする。つまり、この口語的に頻繁に用いられるつなぎ言葉は、全体的な解明がまだなされていないと言ってもよい。

次節では、先行的に説明されている多義的な I mean の意味を、主に

BNC (British National Corpus) から抽出した I mean のデータなどを利用し提示する。そして 3 節では本論の拠って立つ理論的基盤である関連性理論の枠組みを紹介する。さらに 4 節では、Yamada (2007) での you know の議論と談話連結語である so などを比較し、I mean が先行発話の内容を「修正・調整」という手続き的情報を記号化し、発話の非明示的側面に貢献する言語表現であると主張する。

2. I mean の多様な表れ

I mean の持つ意味については、Crystal and Davy (1975) や Erman (1987)、Fox Tree and Schrock (2002)、Schiffrin (1987) といった先行研究などがある。しかし、議論の方法やその意味機能の提示方法など様々である。そこで本論では、これら先行研究の分類を手がかりにし、BNC などの発話データと先行研究における分類をベースにして、I mean の持つ意味機能を大きく 7 種類に暫定的に分類する。具体的には、補足追加 (supplement)、言い直し (restatement)、明確化 (clarification)、理由説明 (reasoning)、結論 (concluding)、強調 (emphasis)、そして言いよどみ (faltering) の 7 つである。

2.1 補足追加

この I mean の使用は、話し手が発した内容を、聞き手に対し「精密化 (refine)」したり、「具体化 (embody)」しようとするために使用されるものである。

- (1) [Tom asks Jess to eat out for lunch]

Tom: Would you like to go out for a bit to eat? I mean, do

you fancy a curry, a Chinese, or an Italian?

Jess: Oh, I love... Lasagne and canne-linguini and pasta.

(BNC: 0284)

(1) は Tom が Jess をランチに誘う場面である。Tom は「Would you like to go out for a bit to eat?」と誘い、そして続けて、I mean を含む発話 (do you fancy a curry, a Chinese, or an Italian?) を付け加える。この Tom の発話は、Jess は Tom とランチに行くことが当然の事という思いから、ただ単に昼食に誘うだけでなく、具体的な食べ物を追加提示する。この I mean 発話により、聞き手である Jess に答え易くさせている。結果として、彼女の返答も昼食に行くか行かないかという yes/no の返答ではなく、「Lasagne and canne-linguini and pasta」が食べたいという返答になる。つまり話し手は I mean 節を付け加えることで、聞き手により詳細な情報を付加している。

2.2 言い直し

このタイプの I mean は、話し手が前に発した内容を、「修正 (modify)」したり「言い換え (rephrase (または correct))」したりする時に使われるものである。以下の (2) と (3) の例を見てみたい。

(2) Then, you add the peaches — **I mean**, the apricot.

(Quirk et al. 1985, 1313)

ここでの (2) の話し手は、apricot と言おうとするところを間違えて peaches と言ってしまった。そこで I mean 節を加えることで自分が意味しているのは peaches ではなく apricot であることを主張している。

この I mean 発話は、明らかに前の発話からの「修正」や「言い換え」をしている I mean の使用である。また (3) のような、I mean の修正や言い換えの使用もある。

- (3) [Joe, who is a football couch for a girls' team, asks Jess her position]

Joe: Where do you normally play?

Jess: In the park.

Joe (sighed): I mean your position.

Jess: Oh, sorry. Right is best for me. (BNC: 0780)

(3) は (2) と異なり、話し手の発した事象ではなく、聞き手が発した事象への「修正」や「言い換え」である。Jess は今までフットボールのチームでプレイをした事がない。そして監督である Joe の「Where do you normally play?」の質問が、Jess にとって十分明確なものではなかったために、Jess は誤解して「In the park」と答えてしまう。その誤解を Joe は I mean 節により修正している。

2.3 明確化

この明確化の I mean の使用は、2.2 の言い直しの使用と似ているかもしれないが、前発話の内容を言い換えている一方で、(4) のように前節からの内容をより明確にする働きを持つ。

- (4) [A family had been unwelcomed in Northern Ireland and attempts to move to the U. S.]

Sally (sincerely): I hope to teach in public schools in New

York, **I mean** New York public school.

John: Keep up the good work. (BNC: A0U)

Sally は「I hope to teach in public schools in New York」と発話する。そして I mean 発話によって、ニューヨークの public school などどこでもいいわけではなく、New York public school という名前の学校で働きたいのだということを、より明確に聞き手に示している。2.2 のような話し手の言い間違いなどのような「言い直し」の使用とは異なり、話し手は、聞き手に話し手の意図する内容をより明確に伝えている。

2.4 理由説明

(5) や (6) のような理由を説明する機能を持つ I mean の使用もある。前節の内容からの証拠やその理由を提供する I mean 節としての存在もある。

(5) [Someone is suggesting telling them, who are eating lunch now]

I don't want to bother them now. **I mean**, they are eating.

(BBC: ACB)

(6) Ben can open Tom's safe. **I mean** he knows the combination.

(5) の I mean の使用では、前節 (I don't want to bother them now) の理由説明として、話し手は I mean 節を提示している。(6) もまた前節 (Tom can open Bill's safe) の理由説明として、話し手は I mean 節 (he knows the combination) を提示している。共に (5) も (6) も、I mean は前節の内容を後続節で理由説明する事へのマーカーとなってい

る。

2.5 結論

(7) の使用は、話し手の「結論」としての主張を示す I mean の使用である。

(7) Girl A: Jimmy is taller than Tommy.

Girl B: I know. But he is only 4 feet tall—I mean, he is
extremely short. (BBC: ATE)

Girl A の発話への応答として、Girl B は「I know. But he is only 4 feet tall」と発話する。そして、続いて Girl B は、I mean 節において前の発話をまとめている。つまり Girl B は I mean 発話を用いることにより、前節までの会話を結論付けている。

2.6 強調

I mean は「強調」としての使用もある。(8) のように、話し手が、I mean 節を用いることで、前の発話の内容をさらに強調している。

(8) A: Harry is not tall.

B: On the contrary, she is over 7 feet. I mean, she is over 7
feet. (Fraser 1998, 321)

I mean 節により、話し手は「she is over 7 feet」である事を繰り返すことによって強調をする。(9) の使用も同じ強調として考えられるが、(8) と異なり単に繰り返しによるものでは無い。

- (9) [Mother tries to promise her daughter to come back tomorrow]

Mother: You will come back tomorrow, won't you? **I mean**, promise me that! (BBC: 0756)

話し手である母親は、「You will come back tomorrow, won't you?」と娘に必ず明日帰ってくることを約束させている。そして I mean 節 (I mean, promise me that!) により、前の内容を念押しをする。つまり、命題上では繰り返しではないが、話し手は promise me that! と念押しすることで、同じように「帰ってくる」ことを約束させ、前節の話し手の発話を強調している。そして I mean がそのマーカーとなっている。

2.7 言いよどみ

最後に、以下のような I mean の使用もある。これはこれまで提示してきた I mean の使用とは性質の異なるものである。つまり、(10) や (11) のように、話し手が戸惑いながら発話をしているような時に使われる I mean の使用である。

- (10) [Daniel, who is Morey's husband, gazed at her almost with awe and stumbled over his words]

Daniel: You are ... you are ... **I mean**, the Reverend Mores is a very lucky man, Mrs Morey. (BBC: BP1)

- (11) [Barry is making a call to Mr. Mallory to ask for leaving a message]

Barry: Mr. Mallory?

Mallory: Speaking

Barry: Could I—I mean—please can I give you a message for Harriet Shakespeare? (BBC: AC4)

ここまで、I mean の意味を提示するに当たり、その議論を円滑に進めるため、暫定的にその使用を7種類に分類してきた。これらを見るだけでは、I mean は様々な意味を持つように思われる。しかしながら、(2)–(11) のどの I mean 発話も、その使用により、話し手はその先行する発話から後続発話へ、何かしらの「修正」や「調整」のような意図を働かせているようにも思われる。そこで、本論の中心的な議論的枠組みである関連性理論を紹介していきながら、I mean は you know と同様に手続き的情報を記号化している一方で、Yamada (2007) の you know の研究（後で詳述）とは異なり、発話の非明示的側面に貢献する言語表現であることを主張していきたい。その前に次節では、その中心的な議論的枠組みである関連性理論を紹介する。

3. 関連性理論

本論の理論的枠組みである関連性理論では、語の持つ概念的 (conceptual)・手続き的 (procedural) 情報という意味論的区別と、発話の明示的 (explicit)・非明示的 (implicit) 側面への貢献という語用論的区別が議論の中心となる。ここでは関連性理論、とりわけ I mean を議論する際にその中心的議論となる、概念と手続き、発話の明示的・非明示的側面の枠組みを見ていく。

3.1 関連性理論における概念と手続き的言語表現

発話解釈を認知的側面から捉えることは、概念表示と表示算定という2つの側面を区別することになり、このことは2つの形式を持つことになる。ほとんどの語は心的概念の情報を記号化し論理形式を作り上げる。しかし、推論過程が発話解釈に中心的役割を演じているという主張をするこの理論的枠組みでは、言語形式の中には表示ではなく、推論の側面に関わる語の存在を主張した。そして推論の道筋を指し示すことに特化した言語形式は手続きを記号化しているとした (Blakemore (1987))。

ではこの手続き的情報の記号化とは、一体どのようなことなのか。Blakemore (1987, 1992, 2002) に従って見てみる。

(12) Ben can open Tom's safe; He knows the combination.

a. Ben can open Tom's safe.

b. He knows the combination. (Blakemore 1987)

(12) の発話解釈の際、(12a) と (12b) の間に話し手がどのようなつながりを意図したかは通常明らかであろう。しかし、(12a) の解釈に照らして、(12b) の関連性をいかに達成するかを考えた時、この発話を処理することで、どのような効果を引き出すことを意図しているのかが必ずしも明らかではない場合もある。たとえば (12a) が (12b) を結論に導く前提 (premise) あるいは証拠として見られることもあるし、逆に (12b) が前提で (12a) を結論としてみることを意図していることもある。よって話し手が (12a) と (12b) の間に意図している推論関係がどのようなものであるかを指示するための、言語的手段を用いるとなれば、それは極めて有効な手段である。(13) における so と (14) の after all はまさにこの機能に沿うものである。

(13) a. Ben can open Tom's safe. b. So he knows the combination.

(14) a. Ben can open Tom's safe. b. After all he knows the combination.

Soの使用は(13b)が(13a)の文脈含意、すなわち結論として処理されることを提示し、after allは(14b)が(14a)の証拠(または情報の記号化)として使用されることを提示する。どのような発話も呼び出し得る文脈想定と、引き出され得る認知効果の掛け合わせは無限と言っていいほどである。したがって、話し手はsoやafter allのような言語表現を用いて特定の推論関係を際立たせ、発話解釈過程の推論面に制約を課し、よって聞き手が使う推論の可能性の範囲を狭め、2発話間の意図された関係を聞き手に提示することになる。この制約は処理コストを下げ、適切な効果を手に入れるよう仕組まれた推論処理メカニズムなのである。

ここでは話し手が達成するよう意図している認知効果を指示するというのが、これらsoやafter allといった語の意味分析で、これらを談話連結語として分類している。しかしI meanは、soやafter allと同じように手続き的意味を記号化していると思われるが、談話連結語には含まれない。

3.2 発話の表意と推意

発話の明示的・非明示的区別という語用論上の区別も関連性理論の大きな柱の1つである。これは、ある思考を言語形式に乗せるとき、どの程度明示的に言語化し、どの程度明示的に言語化しないかという区別で

ある。Sperber and Wilson (1995) は明示性について次のように定義している。

(15) Explicitness (明示性) :

An assumption communicated by an utterance U is explicit if and only if it is a development of a logical form encoded by U. (Sperber and Wilson 1995, 182)

この定義は、話し手の伝達しようとする意図した想定は、明示的内容である表意 (explicature) と、非明示的想定である推意 (implicature) のいずれかに入ると主張する。表意とは当該の発話の記号化している論理形式の発展である。論理形式は命題に準じる概念的表示であり、論理的に不完全な論理形式から聞き手がたどる過程は、「完全命題」と「発話行為または命題表示態度の記述」を含むものである。つまり、表意とは言語的解釈と語用論的推論の両方から導きだされる。一方、推意は表意ではない伝達されたあらゆる想定、つまりその概念的内容は推論のみで供給される。

3.1 で触れた言語表現の手続き的意味は、定義上、発話の論理形式に現れないものであるが、伝達の明示的側面、非明示的側面のいずれにも影響をあたえる。一方、概念的意味は、発話の論理形式に現れ、結果として論理形式の発展に寄与し、表出命題を構築するのであるから、必然的に明示的伝達に関わるものである。このことは、概念的／手続き的区別 (意味論的区別) と明示的／非明示的区別 (語用論上の区別) という2つの大きな区別が、言語表現の使用に際して、3通りに分類されることを意味する。つまり、(i) 明示的伝達に貢献する概念的表現、(ii) 明示的伝達に貢献する手続き的表現、(iii) 非明示的伝達に貢献す

る手続き的表現のいずれかに、あらゆる言語表現が分類されるということである。You know は Yamada (2007) において、(ii) の「明示的伝達に貢献する手続き的表現」として示したが、本論では I mean を you know とは異なる性質を持つ言語表現、つまり (iii) 「非明示的伝達に貢献する手続き的表現」であることを主張していきたい。そこで I mean が持つ意味を議論するために、多くの研究が you know との比較研究を行っていることから、まず you know と I mean を比較していきながら、I mean が手続き的概念を記号化し発話の推意へ貢献する言語表現であることを示していく。

4. I mean の意味

4.1. I mean と You know

I mean や you know は、so や after all などと同様に、発話の論理形式に現れない事から、手続き的意味を記号化していることは当然のこととして捉えてよいだろう。ここでは、それが発話の明示的・非明示的側面のどちらに貢献する言語情報であるのかが問題になる。Crystal and Davy (1975) や Erman (1987)、Fox Tree and Schrock (2002)、Schiffrin (1987) などの研究で I mean と you know は比較して議論されている。しかし、you know について同じく関連性理論の立場から論じた Yamada (2007) は、you know を以下のような言語表現であると主張する。

(16) A semantic meaning of *you know*:

Procedural meaning: Asserting R, which is the metarepresentation of P

Contributes to higher-level explicature (Yamada 2007, 42)

you know は発話の高次表意 (higher-level explicature)、つまり発話の明示的側面に貢献するものとして議論をした。I mean も同じカテゴリーに含まれる言語表現として議論して良いものだろうか。You know と同様に、I mean は発話の表意に貢献する言語表現なのだろうか。以下の例をみてみたい。

(1) [Tom asks Jess to eat out for lunch]

Tom: Would you like to go out for a bit to eat? I mean/*you know, do you fancy a curry, a Chinese, or an Italian?

Jess: Oh, I love... Lasagne and canne-linguini and pasta.

(BNC: 0284)

(1) の例は、I mean を補足説明として分類した例の1つである。補足説明としての I mean の使用は許容できるだろう。しかし、you know の使用は明らかに許容できるものではない。次の例も見てみたい。

(2) Then, you add the peaches — I mean/?you know, the apricot.

(Quirk et al. 1985, 1313)

(2) の例は、「言い直し」として例示した I mean の使用である。言い直しとしての I mean の使用は当然許容される。しかしながら、you know の使用は受け入れられなくもないが、言い直しの意味ではない。どちらかという、この発話以前に起こった、話し手と聞き手の間でのピーチに関する会話を引き起こすニュアンスである。実際に、you

know の持つ意味を、Yamada (2007) で次のように説明している。

(17) Q. you know P

P: The proposition associated closely with the filler *you know*

R: The metarepresented assumption from P

Q: The ground or reason for R (an assumption the speaker has from previous utterances) (Yamada 2007, 35)

You know から先行する発話を Q、You know 発話を P とし、そして you know により聞き手は R というメタ表示された想定を導出されることを求められる。そしてその根拠に Q があるという因果関係を表すマーカーとしての you know の存在を提示している。つまり (2) の例においては、話し手の you know 発話により、聞き手は the apricots から導出される想定を操作することを求められる。そしてその根拠として先行発話 (you add the peaches) があるとする。聞き手にとっては非常に処理労力のかかるものである。I mean 節が発せられたときに、聞き手は同様な操作をしているとは直観的にも考えにくい。この I mean の例の場合、先行する発話 (you add the peaches) から、I mean を聞いた聞き手は、先行発話から関連する情報が I mean 節によってもたらされることを予期するだろう。上の (1) と (2) の例では、それぞれが言い直しであるし、補足説明であるということだ。つまり、I mean は you know とは明らかに同じカテゴリーで説明出来るものではなく、よって、発話の高次表意に貢献する言語表現ではないということだ。では、I mean はどのような立場なのだろうか。先行発話と I mean 節、つまり後続発話との関係で処理されるというならば、but や so などと言っ

た関連性理論で説明する談話連結語 (discourse connectives) と同じカテゴリーに入るものであると考えられるのであろうか。もしそうであるならば、I mean は you know とは異なり、発話の推意に関わる言語表現であることになるだろう。ここで Fraser (1988, 1990) の議論から関連性理論の考える談話連結語と I mean の関係について見てみる。

4.2. 談話連結語と I mean

Fraser (1988, 1990) は、so や however, but などの関連性理論の考える談話連結語を、先行する発話と、後続の発話との間に関連があることを知らせるマーカーとして、以下のように提示している。

- (18) Discourse markers are expressions which signal a sequential relationship between the current basic message and the previous discourse. (Fraser 1990, 383)

つまり先行節を (P)、後続節を (Q) とするならば、so や but のような語が、P と Q の命題を連結しているものを談話連結語と言う。しかしその一方で、I mean や you know は談話連結語ではなく parallel markers として処理すべであるとする。I mean や you know は必ずしも以下のように命題同士を連結していないのがその主な理由である。

(19) の例のように、前発話 (I really like eating raw pickles) と後発話 (John is more of a friend than a lover) との間に何かしらの関係を指示しているのは、明らかに you know ではなく and である。You know は命題同士を連結してはいない。

- (19) I really like eating raw pickles and John is, **you know**, more

of a friend than a lover.

(Fraser 1990, 392)

この例の *you know* は文の中に挿入的に使われているが、*you know* や *I mean* といったつなぎ言葉は、Fraser も言うように、文の先頭 (sentence-initial)、中ほど (sentence-medial)、そして文末 (sentence-final) のどこでも現れる。これでは談話連結語として機能しているかは疑わしい (Fraser (1988, 26) にも記述)。この Fraser が説明する (19) の例は *you know* のものだが、Fraser は、*I mean* についても基本的には *you know* と同じであると説明する。もう 1 つは、Fraser が主張するように、*you know* や *I mean* は談話連結語と異なり、ディスコース内において連続して起こる関係に働く機能 (sequential discourse relationship) を持っておらず、その一方で、一連の発話における話し手の態度 (attitude of solidarity) を聞き手に送るマーカーとしての機能を持っているという。その点においても、談話連結語ではないと結論付けることが出来よう。しかしながら、談話連結語と *I mean* などのつなぎ言葉は全く異なる性質を持つものではない。4.3 で談話連結語である *so* と *I mean* を比べてみたい。

4.3 談話連結語 *So* と *I mean*

I mean の持つ意味は、*so* のそれと全く異なるわけではない。それぞれが持つ意味として似ているところもある。前出の *so* の例文と比較しながら以下の例を見てみたい。

(20) Ben can open Tom's safe. So he knows the combination.

(a) Ben can open Tom's safe.

(b) He knows the combination.

Procedural information encoded by “so”: process (b) as a conclusion

この発話の表出命題は、先行発話 (a) と後続する (b) である。この2つの発話を連結する談話連結語 so は、(b) が (a) の文脈含意で、so は手続き的意味を記号化するマーカーとして、聞き手に結論を導くものとして処理されることを提示している (Wilson and Sperber (1993, 14))。談話連結 so が、結論を導くマーカーとしての機能を有しているのならば、(21) の I mean の例と比べてみたい。この例も I mean の使用により、聞き手に「結論」を導かせるものとして分類した (7) の例である。So と比較しながら改めて見てみたい。

(21) Girl A: Jimmy is taller than Tommy.

Girl B: (a) I know. But he is only 4 feet tall — **I mean**, he is extremely short. (BBC: ATE)

(b) I know. But he is only 4 feet tall — **So**, he is extremely short.

(22) [Tom asks Jess to eat out for lunch]

(a) Tom: Would you like to go out for a bit to eat? **I mean**, do you fancy a curry, a Chinese, or an Italian?

(BBC: 0284)

(b) Tom: Would you like to go out for a bit to eat? **?So**, do you fancy a curry, a Chinese, or an Italian?

(23) (a) Then, you add the peaches — **I mean**, the apricots.

(Quirk et al. 1985, 1313)

(b) Then, you add the peaches — ***So**, the apricots.

(21) の結論の例は、I mean も so も許容できる。双方とも先行節 (he is only 4 feet tall) に対して、先行発話の結論として I mean (または So) 節があると説明出来る。しかし、(22) の使用は (21) と同様には行かない。(1) の「補足追加」として提示した例であるが、(22b) の so の使用は補足追加として機能していない。I mean の使用のように、話し手である Tom が、昼食に行くことを前提として、聞き手である Jess に尋ねた発話とは思われない。また、(23b) の so の使用は到底受け入れられない。この I mean は (2) の「言い直し」の例として挙げたものであるが、結論を導くマーカーである so にはその機能は無いことは一目瞭然であろう。このように考えると、I mean は so と同様に結論を導くという意味機能を持っているのは確かなようだが、それだけではなく、他にも so が持たない意味があると理解できる。下の例も見てみたい。

(24) (a) So, you've spent all your money. (Blakemore 1988, 189)

(b) ?I mean, you've spent all your money.

(24) は共に先行発話が明示的ではない例である。(24a) の so の使用は明らかに受容出来る一方で、(24b) の I mean の使用は容認されないかもしれない。So には先行する命題が明示的でなくてもよいが、I mean は言語的に先行する命題から、I mean 節への結びつきが強いマーカーであると想像できる。では、(20) のような so の持つ手続き的意味の提示のように、I mean はどのような手続きを持っているのであろうか。

4.4 どのような手続きか

(24) の例から、I mean は、先行する命題と何らかの関係を明示的に求めるマーカーであることが分かる。つまり、先行命題を P、I mean が現れる命題を Q としたときに、(25) というスキーマに当てはめて考えることが出来るだろう。

(25) P I mean Q

この先行命題 P と後続命題、つまり I mean 命題の間の関係とはどのようなものであるか。言い換えれば、聞き手は話し手の I mean 発話により、先行命題 P から、I mean の使用により、聞き手は後続発話へどのような想定を持つのだろうか。まず 4.3 で触れた「言い直し」、「明確化」、そして「結論」の 3 つの I mean の意味から (25) のスキーマにいれて考えてみる。

(2) Then, you add the peaches — **I mean**, the apricot.

(Quirk et al. 1985, 1313)

P: you add the peaches

Q: (you add) the apricot

(4) Sally (sincerely): I hope to teach in public schools in New York, **I mean** New York public school. (BBC: A0U)

P: I hope to teach in public schools in New York

Q: (I hope to teach at) New York public school

(7) Girl B: I know. But he is only 4 feet tall — **I mean**, he is extremely short. (BBC: ATE)

P: he is only 4 feet tall

Q: he is extremely short

(2) の言い直しの使用において、話し手の先行発話 P に対し、I mean 節は P を言い換えることによって apricot であると修正している。Q の命題は the apricot だけだが、「Q: (you add) the apricot」ということになろう。また、(4) の明確化の使用においては、話し手である Sally の先行発話 P に対して、I mean 節は、同様に P と言い換えることによって、より明確に表示している。これも Q の命題は「Q: (I hope to teach at) New York public school」ということになろう。話し手は I mean を使用することでより明確な言及をしている。さらに、(7) の結論の例においては、同様に先行発話 P に対して、I mean を用い、Q 節を発することで、P の 4 フィートの背の高さしかないということを、結局は背が低いのだということを聞き手に結論づけさせる。つまり (4) も (7) も、(2) と同様に話し手の I mean の使用により、P の発話内容を「修正」や「調整」し、そして聞き手により的確な情報を送るメーカーとしている。

他の例を順番に見てみたい。(1) の「補足追加」の I mean の例を試みる。

(1) [Tom asks Jess to eat out for lunch]

Tom: Would you like to go out for a bit to eat? I mean, do you fancy a curry, a Chinese, or an Italian?

(BBC: 0284)

P: Would you like to go out for a bit to eat?

Q: Do you fancy a curry, a Chinese, or an Italian?

話し手である Tom は、聞き手である Jess とは毎回のように昼食に出かけている。よって Tom にとっても Jess にとっても、昼食に行くことは当然であるというコンテキストである。Tom は I mean 発話によって、食べることは前提にして、具体的に何を食べるかを聞いている。つまり I mean の使用により先行発話 (P) から、より説得性のある具体的事象 (Q) を聞き手に提示することで、話し手はさらなる明確な修正を行う。よって、聞き手により積極的な応答を促している。

(5) と (6) の「理由」の I mean の例も見てみたい。

(5) [Someone is suggesting telling them, who are eating lunch now]

I don't want to bother them now. **I mean**, they are eating.

(BBC: ACB)

P: I don't want to bother them now.

Q: They are eating.

(6) Ben can open Tom's safe. **I mean** he knows the combination.

P: Ben can open Tom's safe.

Q: He knows the combination.

(5) と (6) も、話し手は先行発話 (P) を発する。そして続いて I mean 発話 (Q) をすることで、P の理由・根拠として Q があることを聞き手に提示し、同時に Q の命題内容を聞き手に伝えたいという意図がある。具体的に、(5) は話し手は P (I don't want to bother them now) と聞き手に発するその理由として Q (They are eating) を提示する。(6) も同様に、話し手は P (Ben can open Tom's safe) のその根拠として、Q (he knows the combination) を提示する。つまり、I mean の使用

により、P と Q の因果関係を明示的にすると共に、Q の情報をより明示的・具体的にすることで聞き手に伝達をする。言い換えれば、話し手の I mean 発話により、聞き手が話し手に伝えたいより具体的な情報を得るマーカーとなるといえる。

「強調」の例とした (8) や (9) も同様に説明できるであろう。

(8) A: Harry is not tall.

B: On the contrary, she is over 7 feet. **I mean**, she is over 7 feet. (Fraser 1998, 321)

P: she is over 7 feet.

Q: she is over 7 feet.

話し手 B の先行発話 (P) と後続発話の命題 (Q) は同じである。しかし話し手は同じ事を繰り返すことで強調している。話し手は、先行発話の内容を I mean 節で繰り返し強調をしていることで、先行発話内容こそが聞き手に伝えたいことであるという意図を持つ。I mean が話し手の発話の方向性を聞き手に修正していると考えられる。

(9) [Mother tries to promise her daughter to come back tomorrow]

Mother: You will come back tomorrow, won't you? **I mean**, promise me that! (BBC: 0756)

P: You will come back tomorrow, won't you?

Q: (You) promise me (that you will come back tomorrow) !

(9) も同様な説明が可能だろう。話し手である母は、先行発話 (P) に

より、娘に明日必ず帰宅することを確かめる。そして I mean 発話 (Q) において、先行発話の付加疑問文による聞き手である娘への同意ではなく、命令文を使うことでより強い修正を娘に与えている。(8) も (9) も I mean の使用により、P の命題内容から想定を、Q により「修正・調整」することでより強固なものとしている。(3) の (2) と少し変わった「修正」の例を見てみる。

(3) [Joe, who is a football couch for a girls' team, asks Jess her position]

Joe: Where do you normally play?

Jess: In the park.

Joe (sighed): I mean your position.

Jess: Oh, sorry. Right is best for me. (BBC: 0780)

(3) の I mean 発話は、明示的発話としての P がない。そこで話し手は、状況的に P と関係付けられる想定 P' (Jess normally plays in the park, and might have never played on a pitch) を作ることになる。話し手である Joe は、I mean 発話 (I mean your position) により、Jess の発話 (In the park) からの起こっている Jess の誤解と Joe の想定 P' を「修正」することになる。よって Jess は「Oh, sorry. Right is best for me」と返答することになる。

最後に言いよどみと題した挿入的に使われる I mean の使用も同様に説明がつく。

(10) [Daniel, who is Morey's husband, gazed at her almost with awe and stumbled over his words]

Daniel: You are … you are … **I mean**, the Reverend Mores is
a very lucky man, Mrs Morey. (BBC: BP1)

- (11) [Barry is making a call to Mr. Mallory to ask for leaving a message]

Barry: Mr. Mallory?

Mallory: Speaking

Barry: Could I—I **mean**—please can I give you a message
for Harriet Shakespeare? (BBC: AC4)

(10) と (11) は共に先行発話 P は明示的ではない。かといって、(3) と異なり、そこから状況的に導き出される想定も無い。P は何かと言えば、「you are… you are…」や「could I…」といったものである。これらは意味を成していないと言ってもいい。しかし音声的にこれらの発話がされていることで、聞き手は話し手に何かしらの注意を向けることになる。そこから導き出される不完全な想定も有るだろう。つまり P の命題内容をあえて言うならば、P' (Speaker wants to say something to hearer) ということになろう。そこで聞き手は話し手に注意を向け、そして I mean 発話により聞き手は I mean 節を解釈する。これら (10) と (11) の I mean も、P からの発話内容を調整するように聞き手に指示している。よってこれらの I mean の使用も「修正・調整」のマーカーとして解釈出来るであろう。

以上、初めに提示した様々な I mean の使用は、「修正・調整」のマーカーとして一様な解釈が可能であると考えられるだろう。

5. 結論

本論ではつなぎ言葉 (fillers) として議論されてきた I mean を、同じつなぎ言葉である you know と比較しながら、関連性理論の枠組みにおいて、その意味機能を探ってきた。I mean が持つ意味は以下のように提示できる。

- (26) I mean: P からの発話内容の「修正・調整」をせよ。結果、Q によりその「修正・調整」を行うことになる

Yamada (2007) において、発話の表意、特に高次表意に関わる言語表現として議論した You know とは異なり、I mean は発話の非明示的側面に貢献する手続き的情報を記号化する言語表現である。「P I mean Q.」というスキーマにおいて、I mean は先行発話からの命題内容を調整し、話し手が Q によりの確な情報を提供する、つまり「修正・調整 (adjustment)」をすることを聞き手に知らしめるマーカーであると結論付けることができる。

You know は Yamada (2007) で議論してきたように、発話の明示的側面、言い換えれば高次表意に貢献する言語表現として議論してきた。一方 I mean は、発話の推意を導出するとき、話し手が聞き手にとってもらいたいと意図している推論の道筋が何であることを指示するということである。つまり伝達の非明示的側面に影響するということは明らかであろう。多くの先行研究では I mean と you know は一緒に研究がなされ、その違いはあまり明確にはされてきていないが、関連性理論の枠組みにおいては、この両者の違いが明確に見えてくる。

まだ問題が解決したわけではない。1 つには、you know や I mean といったつなぎ言葉は、これら 2 つだけではない。他にも You see や I know、you mean などまだ関連性理論の枠組みにおいて議論されていないものがたくさんある。これらのつなぎ言葉を検討していくことで、更なる理論の展開を期待したいと考える。

参考文献

- Blakemore, D. (1987) *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Blakemore, D. (1988) 'So' as a constraint on relevance. *Mental Representations: The Interface between Language and Reality*. (ed.) Kempson, R. M. Cambridge: Cambridge University Press. 28-51.
- Blakemore, D. (1992) *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell. 武内道子, 山崎英一訳. (1994) 『ひとはどう発話を理解するか——関連性理論入門——』東京: ひつじ書房.
- Blakemore, D. (2002) *Relevance and Linguistic Meaning: The Semantics and Pragmatics of Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Crystal, D. and Davy, D. (1975) *Advanced conversational English*. London: Longman.
- Erman, B. (1987) *Pragmatic expressions in English: a study of you know, you see, and I mean in face-to-face conversation*. Stockholm: Almqvist & Wiksell International.
- Fox Tree, J. and Schrock, J. (2002) Basic meaning of *you know* and *I mean*. *Journal of Pragmatics* 34, 727-747.
- Fraser, B. (1988) Types of English discourse markers. *Acta Linguistica Hungarica* 38, 19-33.
- Fraser, B. (1990) An approach to discourse markers. *Journal of pragmatics* 14, 383-395.
- Fraser, B. (1998) Contrastive discourse markers in English. (eds.) Jucker, A. and Ziv, Y. *Discourse Markers: Descriptions and Theories*. Amsterdam: John Benjamins. 301-326.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and Svartvik, J. (1972) *A grammar of contemporary English*. Harlow: Longman.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. and Svartvik J. (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.

- Schiffrin, D. (1987) *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wilson, D. and Sperber, D. (1993) Linguistic form and relevance. *Lingua* 90, 1-25.
- Wilson, D. and Sperber, D. (1995) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. 2nd ed. 内田聖二, 中遠俊明, 宗南先, 田中圭子訳. 『関連性理論——伝達と認知——』(1999) 東京: 研究社出版.
- Yamada, D. (2007) *English filler you know: an approach from relevance-theoretic account*. MA dissertation. Univerisity of Leeds, UK.